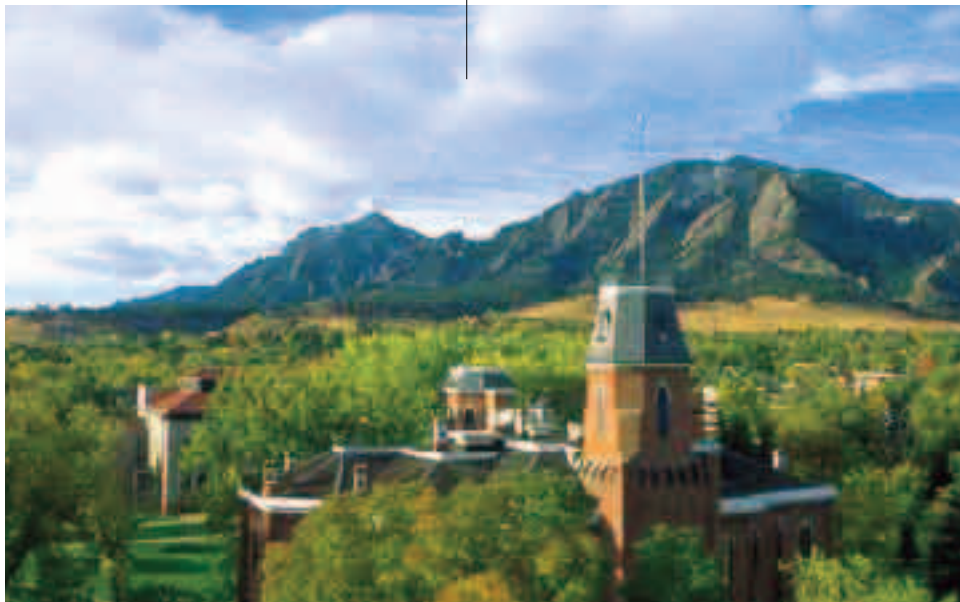


米国コロラド大学 ボルダー校を訪れて



おがたひろあき
緒方広明

工学部知能情報工学科 助教授 [知能工学]

University of Colorado at Boulder

私は、平成13年9月から平成15年2月までの約1年半、米国コロラド大学ボルダー校生涯学習デザイン研究所 (Center for Lifelong Learning and Design:以下 L3Dと略す)を訪ねました。ボルダーといえば、マラソンの高地トレーニングの地として思い出される方も多いかもしれませんが、ロッキー山脈の麓にある、標高約1600m、人口10万人ほどの大学町です。

私が携わった研究は、注意・言語・記憶・思考・認識・推論などの認知機能に障害をもつ人々(cognitive disabilities)を計算機支援環境に取り込み、そのコミュニティを支援し、様々な認知レベルにいる人々のニーズや学習スタイルに合わせて情報システムを提供するというものです。また、Social Creativityプロジェクトは、ヒトが社会で生きていく中で、学習・創造するプロセスをモデル化し、計算機で支援するものです。これは、Linuxのようなopen source softwareやオンライン授業を対象にモデル化を行いました。

まず最初に、研究所に所属して驚かされたのは、様々な分野の専門家が研究に参加していることです。例えば計算機科学、認知科学、建築学、分子細胞生物学、コミュニケーション学など様々です。この組織作りは、L3Dの所長であるFischer教授がプロジェクトの企画段階で興味をある人を幅広く募り、研究者の興味を元に自由に自発的に研究者コミュニティが作られます。新しい学際領域の研究には、このような自由な組織作りも必要ではと改めて思いました。

一方、生活面では、自由な文化はいいのですが、子供の教育面では少し問題もありました。4歳になる娘が通っていた幼稚園ではランチが出るのですが、好きなものを好きなだけ食べて、残ったものはゴミ箱に捨ててしまうのです。ミルクは流し台に流して捨てますし、これを家に帰っても、当然のようにします。これには夫婦共々、困りました。日本では出された食べ物はできるだけ残さず、残しても捨てたりはしないという感じですが、これにはびっくりしました。といってもアメリカのランチですから、日本でいるように全て残さず食べるのは、自分でも難しく、家の中ではそのようなことはしないように言い聞かせました。「自由」ということを少し考えさせられました。

最後になりましたが、今回の滞在の機会を与えて下さいました、知能情報工学科の矢野教授をはじめ教職員の方々、並びに関係各位に感謝致します。

Colorado

